やがて寂寞

笹沢左保

東方社

寂寞（せきばく）てがや

（乱丁・落丁の場合はお取替え致します）

昭和四十年四月十五日発行

定価三八〇円

著作者　笹沢左保（ささざわさお）
発行者　石渡磨須子
整版者　内田柳次郎

東京都文京区高田豊川町六〇
発行所　東方社
振替東京五七七七四番
電話大塚（九〇三）一八七三番

（印刷・邦文堂印刷所）

© 1965 Tohosya Printed in Japan

やがて寂寞

笹沢左保

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

目次

灰色の英雄　5
二度死んだ男　61
赤い月　79
遅すぎた男　115
娘をそこで見た　161
やがて寂寞　181

DESIGN ＊ 玉井ヒロテル

PHOTO ＊ 松本 寿信

灰色の英雄

1

暗い。音がする。しかし、静かだ。音は、何の摩擦音か判然としないのだ。人の息づかい、忍び笑い、あるいは畳の上をすり足で歩く、糊の利いた布地をこすつている、というふうにも聞こえる。電車の響き、自動車の警笛、が遠くからそれに重なる。窓の外の旅館のネオンが、ジーッと鳴つている。薄いカーテンが揺れるその音までが、聞こえて来る。そうした空気の震動が、絶え間なく耳を掩(おお)つているのだ。音ではあつても、それは音にはならない。静かである。

闇は、天井の部分で最も濃くなつている。窓の外のネオンの点滅が、薄いカーテンを通して、畳の上に投写している。淡く、そして乾いた明るさだつた。目をあいても、視界には何もなかつた。目をこらしても、電灯の傘さえ認められない。

寒かつた。火の気がないからではなかつた。部屋の空気が、妙に湿つている。手をのばして畳を撫でてみると、その表面は濡れているように冷たかつた。部屋には、鏡台と安もののテーブルがあるだけなのだ。ここには、人の生活の温かみがまつたくなかつた。寒いのは、そのせいかも知れない。

匂いもない。もつとも、寝具には何らかの匂いがしみこんでいることだろう。名も知らない、見たこともない人間の体臭、香料、または髪の毛の匂いがついているに違いない。しかし、そうした匂い

は嗅ぎたくなかつた。思いきり掛け布団をずらして、胸のあたりに縁を置いているのもそのせいだつた。

この部屋の外では、いろいろのものが動き、走り、移動しているだろう。多くの人々が、生きて、笑つて、泣いているのである。だが、ここは孤立した世界だつた。部屋の外とは、何の繋りもない。拒みはしないが、ここへは何も入つて来ようとはしないのである。それに、何かを招きたいとも思わない。これで、いいのである。布団の中に貯えられつつある自分の体温だけを感じながら、何も考えないでいる。そうしていることが、いちばん落着けるのだつた。

昨日までのことは遠い。明日のことは分からない。しかし、こうしている限り現在が永遠に続きそうな気がする。現在が永遠に続く——決して幸福なことだとは思わないが、最も心が休まるのではないか。

知つている顔は、遙か彼方に遠ざかつた。今は、彼らについて思い浮かべることもない。出来ることなら、今後も人と知り合いたくはなかつた。人間は、自分以外の人間と親しくならない方がいいような気がする。親子も兄弟も、そして男と女もである。

心からそんなことを望んでいるのかどうか——と、自分に問いかけているうちに眠くなつた。大して疲れてもいないくせに、頭の中に波紋を描くようにいくつも輪が広がつて、それが身体中へ倦怠感

となつて伝わつて行く。石ころが足許へ転がつて来て、すつと消える。消えたと思うと、次の石ころがまた足許へ転がつて来る。半ば夢見るように頭の中でそんな繰り返しを捉えているうちに、まぶたが重くなる。

不意に、畳の上に青白い四角形が描かれた。闇が鋭く裂かれると、とたんに意識がはつきりした。だが、すぐに青白い四角形は消えて、もと通り闇が縫い合わされた。

瀬川練太郎は、顔を横にねじ向けた。目は覚めていた。練太郎は、部屋の入口に近い壁のあたりを凝視した。ドアがあき、廊下の明かりが部屋の中へ流れ込んで来て、すぐまたドアは閉じられた。誰かが部屋の中へ入つて来たのである。その人間は、壁にへばりついている。佇んでいる人影に、立体感がなかつた。壁に貼りついて、息を凝らしている。こちらの様子を窺つているような、押し殺した息づかいが聞こえる。何秒間か、不意の闖入者もそして練太郎も動かなかつた。

「誰？」

やがて、練太郎は小さく声をかけた。なぜ、声を低めたのか自分でも分からなかつた。ただ、そうしなければ悪いような気がしたのである。

「返事しないと、電気をつけるよ」

練太郎は、黙つている相手にもう一度言葉を投げかけた。人影が揺らいだ。緩慢な動き方だつた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

影は畳に吸い込まれるように、小さくなつた。畳をこするような音がした。人影は、腰を落とすようにして坐り込んだのである。

「電気をつけないで……」

思つたより近くで、女の声がした。かすれたような、それでいてか細い声だつた。女は、目測よりも近いところに坐り込んだらしい。それにしては、女の匂いがしないと練太郎は思つた。彼の親しい女たちは、一メートルと離れていないところにいればまず女としての匂いが存在を告げるのであつた。

「何か用？」

練太郎は、枕許のスタンドへのばしかけた手を引つ込めた。

「別に……」

女の声は、そう答えた。泣き疲れた時のような吐息が、その言葉のあとで洩れた。稚い口つきである。若い女らしかつた。まだ、少女というべき年頃なのかも知れない。女の匂いがしないのも、そのせいなのだろう。

「用がないのに、なぜここへ来たんだ」

「逃げて来たの」

若い女は、心持ち緊迫した口調で答えた。目が馴れて来て、相手の身体の輪郭が練太郎のすぐ脇に浮き上がつた、小柄である、撫で肩で、華奢な身体つきのようであつた。手と膝頭と、それに顔だけが闇の中に白く浮いていた。

「どこから？」

練太郎は、逃げる追われているといつた危機感を、特に感じないで言つた。

「隣の部屋からよ」

「隣の部屋からね」

「そう」

「誰と一緒だつたんだ？」

「知らない人よ」

「知らない人？」

「丁度、今のわたしとあんたのように……」

「なるほどね」

変つている女だと、練太郎は思つた。しかし、別に腹立たしくは感じなかつた。乾ききつた砂地に、ぽとりと水滴を落とされたように、練太郎の胸のうちで少しばかり興味が凝結した。

「知らない人と、どうしてこの旅館へ来たんだ？」
「わたし、お金を持つていないのよ。お腹も空いていたし泊まるところもなかつたわ。池袋の駅前をぼんやり歩いていたら、その人に声をかけられたの」
「男だな？」
「そう。五十ぐらいの紳士ふうの男よ。会社員、それも部長クラスね。もしかしたら、重役かも知れないわ。小太りで、お酒も飲んでいないのに赤い顔をしているの。とつても親切で、デパートの食堂へ連れてつてくれたわ。それから、この旅館へ来たの」
「その男と二人で？」
「ええ。その人が誘つてくれたし、わたしには泊まるところがなかつたし……」
「ここへ来てからは？」
「その人は、ビールを飲んだわ。わたしは、テレビを見ながらジュースを三本も飲んじやつたの」
「君がいた部屋には、テレビがあつたのかい？」
「冷蔵庫もあつたわ。お風呂がついていて……。同じ旅館でもこの部屋とはずいぶん違うみたいね」
「それから、どうしたんだ？」
「それからね。寝ようつて言うのよ。でも、次の間には布団が一つきり敷いてないの。わたし、変な

ことされると嫌だから、一緒には寝ないつて言つたのよ。そうしたら、その人とても怒つて……」
「怒つたのか……」
「飛びかかつて来たわ。凄い力なの、声をあげたつて、誰も来てくれなかつた。どうしようもなかつたのよ」
「どうしようもなかつたつて、もう、すんでしまつたことなのかい？」
「うん……」
「それで、その男は？」
「わたしが、死んだようになつていると、裸にしたわたしの上に布団をかぶせておいて、自分はお風呂に入つてしまつたわ。お風呂から出て来れば、また同じようなことをされるんだと思つたから、わたし大急ぎで洋服を着て、逃げ出して来たの」
「どうして旅館の外へ逃げ出さなかつたんだ」
「わたし一人だけ帰ろうとすれば、旅館の人に怪しまれるでしよう。それに、ここのお勘定を払うのはあの人なんだから……」
「どうすればいいんだ」
「逃げられれば、それでいいのよ」

「しかし、君はその男に犯されたんじゃないか」
「だつて、仕方がないわ」
女の声は、少しも湿つぽくなかつた。たつた今、誰だとも分からない男に半ば暴力で関係を強いられて来た若い女とは思えないほどさつぱりしているのである。しかし、女の言葉つきには、何となく虚ろな響きがあつた。屈辱には馴れきつている人間が屈辱を受けた時の、あの夕暮れのような弱々しい明るさが、女のポーズとなつているのではないか。練太郎は、予告なしにスタンドのスイッチをひねつた。
世界が、突然変つてしまつたようだつた。眼前に背景が生じて、人物が登場したのである。練太郎は、驚いたような顔でいる少女を見すえた。やはり、女よりは少女と言つた方が相応しかつた。髪の毛を、おさげにしているせいかも知れない。服装次第では、中学生にも見えるだろう。猫背かげんに坐り込んでいて、古ぼけた黒い半オーバーの裾が畳に広がつていた。グレイのセーターの、胸のあたりは薄かつた。膝頭も骨張つていたし、脚も細い。
勿論、化粧の気はなかつた。顔色が、ひどく悪い。青黒く、不健康な肌の色である。美少女という容貌ではなかつた。窪んでいる目が黒く光つていたが、唇には艶がなく、鼻の頭が赤かつた。しかし、女がどんな顔をしていようとどうでもよかつたのである。女の品定めをするわけではない。練太郎は、

女の頬に視点をおいた。そして彼は、そこに雫が流れ落ちたのを認めたのだつた。

少女は、眉をしかめていた。不意に明るくされて、当惑したのに違いない。彼女は右手をあてがつて、慌てて鼻を啜つた。口のきき方は、まるで話術に長けているという感じのそれだつたが、目で見た少女はまつたく垢抜けていなかつた。地方から上京して来た家出娘の、燻んだような野暮ったさがその表情に見受けられた。練太郎はどういうわけか、洗練されてない女だつたこと、それに彼女が涙を流していたことに、安堵感を覚えた。

この時、部屋の外で乱れた足音と人の話し声が聞こえた。少女は、怯えたように腰を浮かせた。何を喋つているか分からないが、廊下で聞こえる人声はひどく慌てているようだつた。

「そこへ入れて……」

少女が這いずつて来て、頭から布団の中へもぐろうとした。

「こつち側の方がいい」

練太郎は、自分の右側の掛布団をめくつた。少女は、練太郎の身体を乗り越えて彼の脇に転がり込んで来た。練太郎はスタンドを消して、少女の方へ身体の向きを変えた。これで部屋の入口に、練太郎は背中を向けた恰好になる。頭から布団をかぶつてしまえば、例え部屋のドアをあけられても、少女を見つけ出される心配はなかつた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.